



発 光 体

夜道でたまたま見つけた、それだけだった。

別に拾って帰ろうとしたわけではない。

ちょっと抱き上げて、できることなら頭を撫でたり嗅いだりして、ひとしきり愛でたら植え込みに戻そうと思っていた。

「このご時世、採用されただけで有難く思ってもらわないと」

入社初日から昼休憩がなく、サービス残業が三時間という会社に入ってしまった。上司は上司で連日会社に泊まっているらしく、ふざけんなよなあと悪態をつきながら、カップ麺の汁の汚れ染みが浮いた毛布をかぶった。なぜか誇らしげに。

私はほんの少し、癒されたいと思っただけだ。

見つめ返さなければ良かったのかもしれない。

はじめ、腕の中でその生き物はじっと私を見た。信じられないくらいにおとなしい子だった。小さい頃、動物園で見たときはあんなに獰猛に見えたのに。瞳は練りたての水飴のようにきらめき、見る角度によって色が全く異なった。

その瞳が、ある瞬間にブルッとふるえた。気のせいかと思ってもう一度見てみる。

と、やはり動いた。その刻まれている一定のリズムに、

「アラーム」という言葉が不意に浮かんだ。

そのふるえはまもなく全身に伝染する。

その子の体毛は皮膚の上で動き出し、縞模様の隊列をなした。きちんと並んだ毛は敬礼するように几帳面に尖り、高速回転を始めた。軸のない、瓶の中で暴れる蠅の行き当たりばったりの回転だ。

私の腕は音もなく裂かれていった。薄いところはさりげなく剥けて赤らみ、深いところは熟れきったアケビのようにぱっくりと割れた。問答無用で血があふれた。

それから、その子は光を放った。どうやら回転に準じた発光らしい。みるみるうちに私の腕が、からだか、光にとけていく。光そのものが爪になる。

こういうとき、普通は手を離すのだろうか。

反射的に、灼けた鉄瓶に触れたときのように。ただ、頭の端に残っていた芥子粒ほどの躊躇が、私の体を縛っていた。

その光が私には何故か、泣いているように思えたのだ。

ほどなくして、回転が収まってきた。光も徐々に弱まり、思い出したかのように夜が戻ってくる

。

私は倒れることさえ忘れていた。

痛み、怠さ、熱。そのいずれも受け止めきれないでいる中、その子はまるで憑き物から離れたようにきょろりとなり、私の頬を舐めあげた。ちいさくて温い、それ単体で生き物のような猛烈な舌は、痛みを和らげるのに何の効果もない。逆にひどくしみる。

明日も仕事だった。

けど、泣きやんだようでよかった。

発光体

<http://p.booklog.jp/book/121748>

著者：堀内幸太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/syrup0117/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/121748>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト